

東京地区

二人六脚風を感じて

盲導犬と歩けば花の香りに鳥のさえずり。久しく忘れていた爽快感。速足を緩めて味わう。



全盲で時速80キロの力・イ・カ・ン～3人8脚も意識して誘導

望月敏彦さん(61) 操さん(76) / 東京都 / 神

エース (LR ♂) ←プライム (MX ♀) ←コナン (LR ♂)

望月さん夫妻のように、二人で1頭の盲導犬を使うユニットをタンデムと呼びます。もともとは2頭の馬を縦につないで走る馬車を指しますが、自転車では二人こぎ用に作られた自転車をタンデムと呼び、競技会もあります。盲導犬歩行の場合は、一人が左手にハーネスを握り、もう一人はその人の右腕や肩につかまって半歩遅れて歩きます。

タンデムは犬も「二人分」の訓練

2017年2月5日は神奈川訓練センターで、望月さんユニットのFU(フォローアップ)とパピーウォーカー講習の6家族にユーザーの体験を話す日でしたが、操さんが車椅子だったためFUはエースと敏彦さんとだけで受けました。1月19日に駅近くの商店街を歩いていて、操さんが歩道に置いてあった荷物につまずいて転び、腰を痛めたのです。車道に止めた小型トラックに店の荷物を積み込む作業中だったのです。「何か作業をしているところを通り抜ける寸前で、ホッとして油断があったかも」と、ハーネスを持っていた敏彦さん。エースは倒れた操さんに寄り添い心配して手や顔をなめる。「だいじょうぶ、エースの責任じゃないよ」と操さん。エースは普段歩いているときも首を右に曲げ、いつも操さんを気にしているようだ。

タンデムは一緒に歩くのが二人だから、障害物をよけるのも二人分の余裕があるかどうか犬が判断して誘導する訓練もする。この日のFUの課題の一つは、エースが盲導犬になってちょうど1年、道の左側に沿って歩くのが原則なのに、エースは右にそれぎみに歩きいつの間にか道の中央寄りになってしまう



▲エースと歩行訓練中の望月さん夫妻



▲さあ！ モータースポーツコースでの課題走行のスタート。スラロームやヘアピン、スピードと急ブレーキへの挑戦だ

癖。もう一つは近所でもすっかり人気者になり、声をかけられるとそちらへとんで行きそうになること。「かわいいから、われわれも甘くなったのかなあ」「そうです、犬も慣れるとゆるむんですよ」「人間の失敗は犬の成功と言うからなあ」とは、FU中の敏彦さんと歩行訓練士森内さんの会話。

夫妻には3頭目の盲導犬。初代のコナンは、誰にでも合わせられる犬だったが、がんを患って今は富士ハーネスのお墓で眠っている。2頭目のプライムは自分をもっているしっかり者。引退後はパピーウォーカーさんに引き取られ、今も電話するとんできて、受話器を通して声をかけたりしている。「エースはだんだん自分を主張するようになってきた」と敏彦さんは言う。無理に左に寄せようとする歩かなくなる。道端の草や塀が、挟まれるようで嫌なようだ。しかし、操さんはエースの右寄りを許している。自分も右足が弱い、右手に白杖を持っているので右側には気を配りやすい。後ろから自動車の音がすると白杖を突きだして目立つようにもする。

でも、「エースは盲導犬のエースです」と声を一段と大きくする操さんの本心は？——とにかくかわいくてしかたがないという風情。右寄り以外は欠点がない。家に来て1年がたったが、1度も「ワン」と吠えたことがない。そのくせ眠っている時に夢をみているのか「ワン、ワン」と小さな声で吠えている。夜も操さんが起きるとケージからこちらを見ている。スーパーに行けば案内係の店員さんを探してくれる。自分の子供とと思っているから、かわいがってもらえるとうれしい。散歩の途中声をかけられると、安全なところで「シット」してなでてもらう。最近には特に子供たちに盲導犬の知識が広まっていると感じている。

出来ないとやらないは違う

「やらないのと、出来ないのは違う」と小さいころから思っ

ていた操さんが、ついに自動車を運転して時速80キロで飛ばしたのは69歳のとき。1歳で視神経にがんが見つかり手術で眼球も失ったが、自分が失明したとは知らずに男の子と木に登ったり、2輪車を乗り回したりしていた。小学校に入るとき、見えないということを知って盲学校に入ったが、「お前には出来ない」と言われるのが一番嫌だった。

視覚障害者のバス旅行の夕食の席で、添乗員さんに「死ぬまでにやりたい一つの夢は車を運転すること」と話したら、返ってきた答えは「夢をかなえてやりたいね」。しばらくして、栃木県の「ツインリンクもてぎ」のアクティブ・セーフティトレーニング・パークが受け入れてくれるという。教習車の運転席に座り、左手をハンドルの9時の位置に、右手を3時の位置に握る。

助手席のインストラクターの「左手を12時に。ハイゆっくり戻して。そろそろブレーキを」の声に従う。女性はバックと車庫入れが苦手と聞いて、「それ やろうじゃないの」と、一発で真ん中に真っすぐ決めた。いよいよモータースポーツコースに出て、直線コースで「飛ばしてもいいよ」と言うから、アクセルを思い切り踏んで80キロの力・イ・カ・ン。思わず自分に「グ〜ヘッド」。

「盲導犬を乗せて車の運転なんて、すごいでしょ」とちやめつ気たっぶりだ。「こんど馬にも乗るの、自分で手綱をもって」。初めて長野の乗馬クラブで乗ったとき、順番待ちの操さんに「あの馬あなたを知ってますよ。じいっとあなたを見ている」と言われ、「馬に知り合いはいないなあ」と近づいたら、私の顔を鼻をすりよせるのよ。「二人とも無鉄砲なんです」と敏彦さん。恒例となったもてぎコースでの会ではもちろん常連。リピーターも増えて教習所の受け入れ能力が満杯に達した。

「いろんなことに挑戦して、視覚障害者はこうだともっと知ってほしい。目が見えなくてかわいそうではなくて……」と言う操さん、「いい人に恵まれて楽しい人生を送っている。神奈川訓練センターも、自分の家に帰ったような気がする」と述懐する。

操さんの地元、東京あきる野市ではり治療院を営んでいるお二人は、「ハリは刺すのではなく、ハリ先が患者に触れただけで『気』が動き、どこの気が病んでいるのかを着る」「ハリは刺したらおしまいです」。「盲導犬を持ったら人生観が変わる」「こんなに世界が広がるものか。近所との交流もよくなり、晴眼者の友達も増えた」と異口同音。それは盲導犬歩行のときの二人の姿に重なる。若い頃は趣味のオーディオで気が合ったお二人だが今や、年上の操さんを見守るようにあうんの呼吸の敏彦さん。理想のタンデムご夫妻です。(取材)

お互いの良いところを合わせ、新たな歩行を創造したい

丸山茂徳さん(65) / 東京都 / 神

ヴィジョン (LR ♀) ← ナサ (MX ♀)

迷路のような新宿の地下道も迷うことなくスイスイと行けるのは、尻尾を揺らしてご機嫌なヴィジョンがいるから。いつもジャケットに帽子といういでたちでハーネスを握っています。

新ユニットとしてデビュー直後のある日、電車を乗り継ぎクラシック・コンサートへと出かけました。クラシック音楽を愛していて、年間100日はコンサートへ行っているのです。昼夜とコンサートのハシゴをすることもあります。ヴィジョンは会場ではそんな私の足元にすっぽりと収まり、オーケストラの音色を子守歌にスヤスヤ眠っています。ちょっと怖がりや慎重派、ハーネスを外すとはしゃぐような幼い面もあって、とにかく一緒にいて面白いパートナーです。

実はヴィジョンとの初対面では、1頭目の犬と比べて体も小さく頼りない感じがして、「大丈夫か?」と不安がよぎりました。ところが一緒に歩いてみると一変、小さな段差もきちんと見つけてくれて、



私はスマートフォンを使って外出先の情報を調べ、あらかじめ頭の中におおよその地図を作っておきます。また沿線の駅を実際に歩いて、電車の車両位置や駅の出口などの情報も持っています。また、シグナルエイドという機器を使って音声信号を確認するなど、安全な歩行のためさまざまな工夫をしています。ヴィジョンとの歩行スピードは、自分のペースからするとまだ70%くらい。ゆっくり焦らず確認しながら、互いの良いところを組み合わせて歩行を築いていこうと、日々ヴィジョンと向き合っています。そして必要な時は周りの人の援助も上手にお願いしながらスマートに歩く。それが私が描く歩行スタイルです。

◀コンサートには、ヴィジョンの首の鈴をはずし、周囲に細心の注意を払って臨みます

「お母さん、これからも一緒に歩いていこうね」

三宅保子さん(59) / 東京都 / 神

エリン (LR ♀) ← フラン (LR ♀)

私はエリン。お母さんの所に来てまだ2年足らず。だけど、お母さんのことはいっぱい知ってるよ。うちのお母さんは、お出かけが大好き。映画にコンサートにヨガに旅行に。それにね、面白そうなイベントにはすぐに顔を突っ込みたがるんだ。私が小さな幸せを拾ってくるからなんだって。小さな幸せをいっぱい集めれば大きな幸せになるからねって言っているんだ。

家の中ではお母さんは一人で動いているの。でも、よく確認せずに動くものだから、いろんな所にゴツンコ。この前も目の上をぶつけて青たん作っていたね。やっぱり私が付いていないとダメかあ。お母さん、ホント気をつけてね。



▲二人で公園のヨガ教室にも参加
▶お母さん、孫ができてから顔がゆるみっぱなしだよ

犬の足先を触ってみると段差の縁5センチ以内にキチンと足をそろえて止まっています。これによって、段差に対して方向がぶれずにまっすぐ進むことができ、ヴィジョンが仕事に集中していることも確認できます。歩くごとにヴィジョンに対する信頼と安心感が増していきました。

私はスマートフォンを使って外出先の情報を調べ、あらかじめ頭の中におおよその地図を作っておきます。また沿線の駅を実際に歩いて、電車の車両位置や駅の出口などの情報も持っています。また、シグナルエイドという機器を使って音声信号を確認するなど、安全な歩行のためさまざまな工夫をしています。ヴィジョンとの歩行スピードは、自分のペースからするとまだ70%くらい。ゆっくり焦らず確認しながら、互いの良いところを組み合わせて歩行を築いていこうと、日々ヴィジョンと向き合っています。そして必要な時は周りの人の援助も上手にお願いしながらスマートに歩く。それが私が描く歩行スタイルです。

盲導犬への社会的理解を広げてさらなる自由を

柳和男さん(29) / 東京都 / 神

エレム (LR ♀)

盲導犬を持ったのは、昨年5月から。私は演奏活動をしており、リハーサルなどで毎回行く場所が違うこともあって盲導犬を持ちたかった。人の手を借りずに自分で自由に行動したいと思ったのです。しかし実際に盲導犬を持ってみると、イメージしていたより難しい部分が多いことが分かりました。実際は訓練・練習を重ねて技術を磨かないと行きたいところに行くことはできない。けれども犬とのコミュニケーションが取れるようになるにつれ、行動範囲が広がったと感じています。

共同訓練中に犬が段差や角を教えてくれるということは習いましたが、今では「犬が教えてくれる」という感覚が分かり、自分の中で強く感じるようになってきました。毎日通る道でも、いつもはそこにはない障害物を避けてくれるのがありがたいです。予想外の場所でエレムがクイツと曲がったなと思ったら、そこに障害物があったりします。ぶつからずに歩けるのは快適です。自由に知らない道を歩けるようになって



◀演奏中は傍らで楽の音(ね)に耳を傾けます

て、外に出たいと思うようになり、その気持ちの変化も喜びです。今では前よりももっともっと外に出たいと強く感じています。以前は杖さぐりでゆっくりゆっくり歩いていたので時間がかかり、外出も最低限になっていました。エレムが来てからは、煩わしさなくスピードを出して歩けるようになり、思い立った時にいつでも自由に出かけられるように生活が変わりました。

今後は社会や自分の仕事の中でも、盲導犬についてもっと理解してもらえるようにしたいです。仕事柄、毎回場所もメンバーも違うので、犬嫌いの人がいないか、嫌な気持ちになる人がいないかが気になります。また、短時間で集まり、音を合わせてすぐ撤収ということも多いので、盲導犬が来たことで用事が増えたり時間がとられやすくなることがあると、今回は連れて行けないと判断することもあります。盲導犬の説明をしないといけなくてもそんな時間がない場合もあるからです。

盲導犬への理解が広がれば仕事にももっと連れ出しやすくなるので、これは社会だけでなく私とエレムにとっても切実な課題です。

夜の飲食店行きもキミーによって妻にバレバレ

井上信雄さん(69) / 東京都 / 神

キミー (GS ♀) ← リリー (GS ♀)

白杖での歩行に抵抗を感じて盲導犬の使用に踏み切りましたが、今は盲導犬と白杖の併用でより安全に歩いています。

最初のパートナーは6歳で亡くなったリリー、そして現在は2代目の5歳のキミーです。リリーを失った時の悲しみは生涯忘れることができません。リリーとの一番の思い出は、カナダとアメリカを周遊したり、リリーの生まれ故郷に立ち寄り訓練センターの方やパピーウォーカー夫妻と交流したりしたことです。視覚障害者がためらいがちな海外旅行に駆り立てられたのも彼女のおかげでした。

傷心しきった私のもとへ1年半後の2014年3月にやって来たのは、性格が全く違うキミーでした。お出かけ意欲に満ちあふれ、私の行動範囲を無限に広げてくれました。

さて、盲導犬と一緒に歩いて遭遇した珍しい体験を披露します。東京・小田急線新宿駅のエレベーターに乗ろうとし

た時、降りてきた高齢夫婦に声をかけられました。「おたくの犬は目が不自由なんですか?」「いや、目が見えない方は私です」。盲導犬の存在は知ってはいたようですが、人と犬の役割を逆だと思っていたそうです。もう一つは、渋谷区を走る都営バスの中での出来事でした。乗車してきた高齢女性が優先席に座る私に「マフラーが落ちてますよ」とささやきました。パートナーが私の膝下に潜り込んでいて、そのフサフサの尻尾がマフラーに見えたのでしょう。

予想していなかった事も起きます。自宅の周辺には飲食店が多くあり、時折パートナーを伴って出かけます。翌朝、妻と一緒に散歩の際、昨夜の店の傍らを通ると、律儀にも閉じているドアの前まで導いてくれました。私の夜の行動は常にバレバレです。私の街は犬の多さでは日本でもトップクラスと思っていますが、そこをさっそうと盲導犬と歩く。これが今の私の目標でありモットーです。



◀神奈川訓練センターで存分に遊びまわって二人とも満足。キミーも呼吸が荒い

モナミさん、ニューヨークへ行く～美術館でブギウギ

難波創太さん(48) / 東京都 / 神

モナミ ♀

朝からかなり降っていたニューヨークの雨も、ランチ・タイムが終わる頃にはやんでいた。レストランの近くには公園があり、その入り口に行くと芝生と土があった。「やっぱり地面は芝と土に限るでしょ」。私が走りたくてバタバタしたからか、主人はハーネスを外してくれた。「やったー」。雨上がりで地面はちょっとぬかるんでいたが、久しぶりの芝生の上の駆けっことはとても気持ちよかった。セントラルパークというらしきこの公園は相当広いらしい。蛇行して横断する車道の向こうには、森のようなものも見える。「モナミ」と主人が呼んでも無視。どこまでも、どこまでも走って行きたかった。とはいっても、私はエリートの盲導犬。しょうがなく主人の元に戻った。足が泥だらけになっちゃったけど、気持ちよかった。

その後、歩いて町の中心地にある美術館に行く。エントランスには多くの人が列を作っていた。私たちが列の最後尾に並ぶと、美術館のスタッフらしき白髪の女性が「こちらにどうぞ」と別のカウンターへ案内してくれた。「スタッフゲストとして無料で入場させてくれたよ、モナミはいつでもVIP扱いだね」。私はクールを装いながらも、「まあね」とちょっと自慢気だった。その美術館はニューヨーク近代美術館といって、世界的にも有名な美術作品が展示されているらしい。たくさんの人が作品を

観ていたが、私はVIP扱いの興奮が続いていたのか、あるいは有名な作品のパワーというのか、マジックにかかったかのようにとでもうれしくなって急に主人と遊びたくなった。

作品の前で、おなかを見せてはしゃいでいたら、周りの人も作品より私を見ていた。「モンドリアンの作品より、モナミの方が価値があるってことだな」。その作品《ブロードウェイ・ブギウギ》にちなんで、それからは私がこうしてはしゃぐと、「モナミがブギウギしている」と主人に言われるようになった。それにしても、なぜあの場所でブギウギしたくなったのか、今でもよく分からない。あの美術館でブギウギした犬って世界で私くらいかも、と主人は鼻高々になりそうだけど、いつかまたブギウギできたらいいな。



▲ニューヨークで地下鉄の改札を通る(左)
▲ニューヨークの街ジオラマを見るモナミ(右)

「盲導犬は大きな支え」～改めて知った顧客先での出来事

荒川明宏さん(50) / 東京都 / 神

グミ ♀

1頭目のクォーツはアイメイト協会から貸与を受け、それから8年間、仕事と一緒に47都道府県を最低3回ずつは出かけました。そんなクォーツも引退を迎え、2頭目は日本盲導犬協会でお世話になることになりました。

待っている4か月間、最初は盲導犬なしで歩くことが恐ろしかった。でも白杖での歩行に慣れ、次第に「いなくてもいいんじゃないか」と考えるようになっていました。会社を経営しているので社員もいるし、別に困らないのではないかと。ある日、取引先へ一人で行く機会がありました。会社までは白杖で行けますが、到着してからは、顧客である取引先の方に手引きされなければならなかったのです。盲導犬がいれば、人についていけば大丈夫だったはずが、お客様に手引きを請うとは。居て当たり前だった盲導犬、実は大きな支えになっていたのだと再発見しました。「もう一度盲導犬と」、心から願ったのです。



▲グミと一緒に今日も仕事だ
◀バス停のベンチに座り、「グミちゃん」と手をかける

今年5月、2頭目のグミちゃんを迎えました。先日は人に手引きをしてもらい話をしながらリードを持って歩いていたら突然、グミちゃんが立ち止まってストライキをおこしました。慌ててハーネスを握ると、機嫌を直してスッと歩きだしました。グミちゃんは本当に面白い。これからがますます楽しみです。

多様性社会における「“moudouken”システム」

杉田啓之さん(56) / 東京都 / 神

グリア ♀

2016年の10月にユーザーになったばかりの56歳の新人です。長年勤務してきた企業で引き続き、そして毎日朗らかに働くことが出来るのもパートナーのグリアのおかげだと、日々感謝しています。

私は共同訓練の修了が近づくにつれてあることに気づきました。それは「盲導犬」が、すでに社会の中でしっかりと確立されたシステム、つまり通信や電気、鉄道といった社会インフラと同じく、「盲導犬」という仕組みも、私たち視覚障害者にとって欠かせない社会システムとしてしっかりと機能しているのではないかと。

もともと、社会は今、私たち障害者の積極的な社会進出をはじめ、女性やシニアの方々のますますの活躍、そして経済のグローバル化における外国人のみなさんとの共生など、従来とは異なる新たな環境が生まれつつあります。ただその結果、これまで社会を支



◀「ハーネス10周年記念イベント」の点灯式を前にグリアと。富士山がとても綺麗でした

えてきたシステムが機能しなくなる兆候も同時に見え隠れしています。それは盲導犬ユーザーと現実社会との乖離(かいり)にもつながるでしょう。実際、私にはすでに見えない「壁」が出来つつあるように感じられてなりません。

こうした「壁」を越えるためには、ユーザー居住地を中心とした盲導犬に対する理解の一層の促進や、交通機関での啓発

表示などが最低限必要です。東京オリンピックを契機に、多言語対応の啓発ツールを整備するのもその一つでしょう。

こうしたことを一つひとつ積み重ねて、今後の多様性社会の中での新たな「moudouken」システムが再構築されてこそ、私たちユーザーのみならず、社会全体が盲導犬との共生を実現できるのではないかと思います。もちろん私も盲導犬ユーザーの一人として、こうした活動に積極的に参画できることを願っています。

見える人と見えない人の間にある壁を壊すには

小林保夫さん(64) / 東京都 / 神

フィル ♂

私が完全に光を失った時、医者これからどのような治療をしていけばいいのか問うた時の答えは、逆に私を戸惑わせただけでした。失明した瞬間「治療は終わりました」と言われ、今後の支援をしてくれる所はと何うと、「パソコンで調べなさい、看護師に聞いてみなさい」と言われて終わり。医者は目の治療をするだけで、失明は死ぬことと同じ扱いだったのです。盲導犬のことを知り、再び外に出ようと思えるようになったのは、それから1年以上後のことでした。

白杖歩行から始めて、いかに目による情報が人を支えているかを実感しました。見ること以外の五感を使って新しい基準を作ることからの出直しです。真つすぐに立つことさえ目に頼っていたとわかり、驚くばかりでした。盲導犬との基本訓練を終えて犬と信頼し合いながら歩くことができたときは、殊更に感激でした。

外に出ると、目が見える人との壁があることを感じるようになりました。見える人の便利が見えない人の便利と離れていることが多いのです。ただ設置するだけで使い勝手に心が配られていない音響信号機や、途中で途切れてしまう危険な手すりなどがいい例です。また、人の心が壁となっていることも大きな障害で、理解できない者同士の恐ろしさがあることも感じまし

た。この壁を壊すには、視覚障害者の方から、実際の話や情報を発信し、広げていかなければいけないと思うのです。

眼科医が視覚障害者のことを理解せず知ろうともしないのが壁です。警察に音響信号機の設置を申請しても「2、3年先になる」と平気で言うことが壁です。役所が申請を理解せず取り下げさせようと強要することが壁です。お互いに遠慮し、何をやってほしいのか正確に伝えず言葉を濁すことも壁です。

お互いの心遣い・気遣いが自然に生まれ、溶け込むことが壁を壊すことだと思います。

◀甘えるフィル君



「理想と違う」～ナタンの述懐

豊田悠子さん(76) / 東京都 / 神

ナタン (♀) ←オゼット (♀)

私ナタンは大勢の家族に囲まれたにぎやかな生活を望んでいたけど、ママと二人だけなの。ママにとっては2頭目。台所に立って料理の下ごしらえやパンを焼く準備をしている時は調子外れで、でたらの歌詞を口ずさむ変な人。でも、これがご機嫌の証拠。私はコンサート会場の音楽と同じように子守歌代わりに寝るのが好き。ラジオやテレビに向かって笑ったり、独り言を言ったりしているので、にぎやかというよりうるさいくらいよ。ある時、呼ばれたのに聞こえないふりしていたら大きな声で注意され、驚いて震えながら行き「ごめんなさい」と謝り、脇の下やおなかに鼻を押し込んで甘えたら優しく頭をなでて許してくれたわけ。でもママお願い、私もう聞こえないふりしないから穏やかな声で注意してね。

それなのにまた、隣室から大きな声が。震えながら飛んでいくと私の鼻の頭を触って「眠っていたのね、ごめん」と。7歳、この頃ウトウトしちゃうのよ。ママは部屋の中ではぶつからないようにソロソロと動くけど、大好きな散歩になると、違う人かと思うほど背筋を伸ばし「盲導犬と失礼します」と、街中や緑道で追い越す快感を味わっているわ。そして5キロウォークのレース参加も私は待ち遠しいの。会場の空気を感じると興奮し、足が自然にモリモリと動き出すのよ。ねえ、次はどこのレースなの？

お店でシャンプーをした後、私はとても気持ちよくて、仕上げの台の上でコックリすると、チーフは「癒やされる」と言ってくれてね。車で送ってくれた人には、私の「たからもの」のぬいぐるみやクッションなどを見せびらかすと

ニコニコ笑ってくれるでしょ。どこへ置いたか探し回ってやっと見つけた鈴の付いた首輪をくわえてドアまで行くと、誰もいません。あっけにと取られて首輪をボタンと落とすと、ママは気の毒そうに「これを探していたのね」と笑いながら首につけてくれました。

そんなママがたまに深くため息をついてギュッと抱きしめて動かないの。きっと、つらいことや悲しいことを耐えているんだわ。私、ずうっとこの家においてあげる。スーパーで買い物の時、私をサービスカウンターの中で待つよう店長さんと交渉してくれて、私は狭い通路を気にせず、のんびり待つのは楽ちんよ。寒い日にダウンしていたらおなかが冷たいので立っていると、店員さんが「ダウン」と言うのです。帰りがけに店員さんはママに「冷たかったのね、今度から段ボールを敷きましょう」と話してくれていたわ。私、ずうっとここでね！



▲東京・神宮のトラックを走るのは快適

人混みでの孤独を消してくれた盲導犬ベス

大城喜和子さん(53) / 東京都 / 神

ベス (♀)

ベスと出会ったのは2014年、真夏の共同訓練でした。とにかくかわいい！あれから3年。それまで白杖歩行でがんがん歩いてけがが絶えなかった視覚障害の私が、ベスと歩いてけがをしなくなりました。今は、一人で無理して歩いていた過去の自分に気がきます。歩くのは苦でなくても、用事以外で外に出るのはやはりおっくうだったのです。

ベスが来てから「良いお天気だから散歩に」と出かけます。新しい道を発見、ふと手を伸ばして実がなっているのを発見、など楽しいです。見えないと、人混みでも孤独を感じるものですが、ベスと一緒にならおしゃべりが楽しく、迷っても不安になりません。

家では息子二人と私でベスに抱きついて「べっちゃんの匂い



▲三姉妹再会。サリーをまもって撮影

かわいい初代、賢い2代目

小沢尚子さん(74) / 東京都 / 神

ポップ (♀) ←キャシー (♀)

これまで2頭の盲導犬と暮らしてきました。個性もそれぞれ、苦労も失敗も得意なこともそれぞれにありました。

私にとって初めての盲導犬キャシーは真っ白で黒目パッチリ、とても人なつこくかわいい子でしたが、最初は本当に大変でした。共同訓練で「犬について行ってはいけない。指示を出しなさい」と教えられましたが、そこは見えない悲しさ。素直な子ゆえ、指示しなければ自分の家も通過してしまうことなど日常茶飯事でした。その上、犬に会えば飛んで行きそうになる。よそ様の手招きにも弱い。初めてのパートナーでしたから「こんなものかな」と思っていました。それでもかわいい、とにかくかわいいパートナーでした。そんなキャシーもとうに引退して、はや16歳。どうやら元気に暮らしているようです。



◀砧公園でポップとお花見

そして2代目のポップは、とても背の高い茶色の大型犬。おとなしい性格でしたが、叱られることが大嫌いなご様子。我が家に来るまでいろいろあったようで、なつくまでに少し時間がかかりました。しかしポップは、時間の経過とともにどんどん「おりこうさん」になっていったのです。

ポップは私が何をしているか、出かけないかと、常に注意を払える子になっていました。道を覚えることが得意なのはもちろん、コンサートや観劇でも静かに待っていてくれる。その一方で、私の指示が間違っていたら決して動かない意志の強さも持っていました。きっと前に障害物がある、通る幅が狭くて危険——そんなことを私に教えてくれていたのでしよう。

そんなポップもすでに9歳。近いうち引退の予定です。3頭目はどんな子が来るかなと思いつつ、賢いけれど甘えん坊なポップとの残り少ない日々を大切に過ごしています。

なんて夢なの！ まったく！ 愛してるよ相棒君

森谷玲子さん(61) / 東京都 / 神

マッシュ (♂)

すぐく混み合っている駅ビルのようなところ。なぜか人波の中を10年ほど前に亡くなった友人に誘導されながら歩いている。階段が続いて歩きにくいなあ。と、左側を見るとマッシュがいない。えっ、どこではぐれたんだ？早く戻らなきゃ。驚くほどの速さで出発点の広場に戻る。わっ、ものすごい人。「マッシュー、マッシュー」。呼んでも返事がない。どこにいるかわかんない、どうしよう。と、ここで目が覚めた。

前にも似たような夢を見た。マッシュを電車に残したまま一人で降りてしまう。夢の中では目が見えているのだ。マッシュ君、レイさんったらひどいよう、なんて思わないでよ。私アンタのこと立派で尊敬すべき相棒だと思っているんだから、置き

去りなんていじわる、決してしないよ。

マッシュが偉いのは、誰にでも「コンニチハ」と愛嬌たっぷりのご挨拶をすること。私はマッシュに「社交的」ということを学んだ。電車で隣同士になった方と短時間のおしゃべりを楽しむことも多くなったよ。

これからも一緒に行かれるところはちょっと無理してもどこでも連れ立っていこうね。よろしく願いますよ、相棒君。



▲相棒君、置き去りになんて絶対しないからね